

教師の「自己評価目録」について（Ⅲ）

— 教師の態度についての行動目録の活用 —

川崎市総合教育センター 丸山 義王

1. 教師の自己評価目録の意義

子どもは悩みを持っている。その悩みを解決するためには、誰かに相談するのがよい。

しかし、子どもは、親とか友だちには、悩みを相談するのであるが、教師に相談することは少ないように思われる。

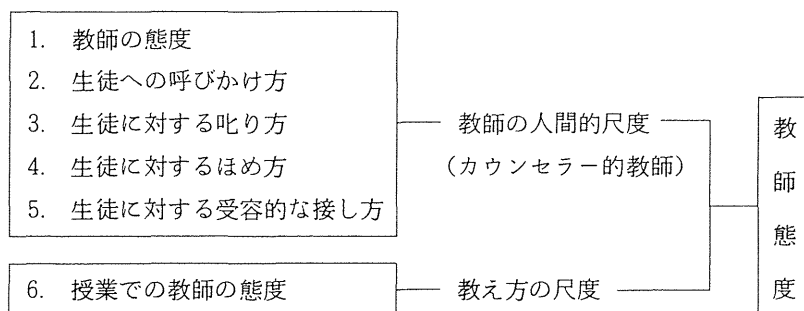
筆者は、かつて、悩みの相談に来た6年生の女子から「先生は忙がしそうで、いつならば、相談できるか、わからないので、だんだんと遅くなってしまった。」といわれ、愕然とした覚えがある。

教師には、知識伝達者として学習指導に当たる側面と、子どもの悩みなどを相談するという治療的な側面がある。しかし、教師は、一般的には、知識伝達の機能には優れている反面、カウンセリング機能に劣るような気がする。子どもが、教師に相談できない理由は、教師の姿勢にかかわるものが大きい。即ち、教師には、「開かれた態度」が必要なのである。そこで教師の開かれた態度とは何かを追求するために開発したのが、「教師の態度について」の目録である。これは、中学生120人に「望ましい先生とは、どのような先生ですか」という質問をして、その答えを取捨し、分類して、項目を作成した。

この目録の内容は、教師の人間的尺度（カウンセラー的教師）の側面と教え方の尺度（授業での教師の態度）の側面から成る。

教師態度の目録の構成は以下のようなようである。

<教師の態度についての行動目録>



生徒理解ということがいわれるが、その内容がはっきりせず、抽象的になりがちである。

この行動目録では、生徒理解の内容と、子どもへの接し方を具体的に記述してある。

そして、この「教師の自己評価目録」は、子どもへの理解のズレを防ぎ、教師の自己反省を深めるという目的のために作成した。

なおこの目録は「生徒理解についての行動目録」と総称し、パート〔1〕「教師の態度」についてと、パート〔2〕「教師の生徒理解」の二部の構成となるが、今度はパート〔1〕の活用についてのみ述べることにする。

2. 教師の態度についての行動目録の活用

この目録は「各項目ごとに1（あてはまらない）2（どちらともいえない）3（あてはまる）の段階の中であてはまるのに○印をつけてください。」という指示によって記入される。

本来的に、この目録は、教師の態度について、教師自身の自己評価のために使用されるのが、目的であるが、各項目は、生徒の意識をもとにして、作成してあるので、これを生徒に対して実施しても無理がなく、その結果は有効なのである。

なぜならば「望ましい教師態度」についての生徒の評価は、裏から見ると、生徒の教師の態度についての批評ともいえ、生徒が教師の態度や授業の仕方をどう見ているのかがわかる。そこでこの目録を川崎市の○中学校において実施し、生徒と教師双方の「教師態度についての意識を調べてみた。その方法は以下のものであり、調査期は昭和63年度である。

① 各学年生徒の意識の比較

対象：1年生40名 2年生44名 3年生50名 合計134名

② 男女生徒の意識の比較

対象：男子69名 女子65名 合計134名

③ 教師の自己評価

対象：同校の教師45名

④ 教師と生徒との意識のずれを比較

対象：生徒134名 教師45名

3. 中学1年・2年・3年生の意識の比較

学年の発達段階により教師の態度についての意識がどう変化するかについて調べた。

低学年ほど教師の個人的な態度に関心があるか、高学年になると、教師態度への関心は減少する。これは3年生にもなると、教師にそれほど接近しなくてもよくなり、自立してくるのが原因の一つとも考えられる。

教師の生徒への呼びかけについては、高学年になるにつけ関心は減少するが、3年生において、「先生の方から声をかけてあいさつをする」が38%と高率を示した。やはり、生徒は、教師からの声かけを望んでいるようだ。

生徒に対しての叱り方については、1. 2. 4. 9. 10の項で3年生の率が高くなっている。これは、3年生になると大人に近くなり、自立してくる反面、学校生活上での摩擦が大となり、教師から叱られることが多くなっているのではないかと思われる。

生徒に対してのほめ方については、8の「個人差を認めたほめ方」について、とくに3年生において高率なのは、個々の生徒が自他の個人差について理解するようになってきたためとも思われる。

生徒に対する受容的な接し方については、「生徒の立場や気持ちになって聞く」の項が各学年を通して高率である。教師の受容的な態度は生徒の心に、即時的には伝わらないものらしく、全体的に生徒の関心が低い。

授業での教師の態度については、「わかりやすく、面白い」授業を各学年ともに希望している。「えこひいきをせず生徒を公平に扱う」の項も各学年とも高率である。「先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終わらせる」の項は3年生において40%と高率である。このような学校生活の基本的なきまりは、教師の方もきちんと守ることが必要であろう。

表-1 教師の態度について中学1年生・2年生・3年生の意識の比較

| | N = 40 | N = 44 | N = 50 | 数字% |
|--------------------|--------|--------|--------|-----|
| | 1年 | 2年 | 3年 | |
| 1. 教師の態度 | | | | |
| 1. 明るいほらかな表情 | 35 | 59 | 48 | |
| 2. ユーモアにとむゆかいな表情 | 72 | 72 | 56 | |
| 3. やさしいまなざし | 12 | 27 | 18 | |
| 4. 暖かいまなざし | 3 | 9 | 22 | |
| 5. 声が大きくよくききとれる | 55 | 36 | 50 | |
| 6. 発音がよく声ははっきりしている | 30 | 27 | 20 | |
| 7. 上品で清潔な服装 | 10 | 43 | 18 | |
| 8. スマートな服装 | 5 | 9 | 6 | |
| 9. 親しみやすくきさく | 52 | 68 | 80 | |
| 10. きびきびしている | 12 | 6 | 18 | |
| 11. 親切である | 52 | 25 | 58 | |
| 12. 健康で休まない | 25 | 9 | 0 | |

N = 40 N = 44 N = 50 数字%

2. 教師の生徒への呼びかけ

1. 先生の方から声をかけあいさつする
2. 廊下や道で会った時、生徒によく声をかける
3. 必ず名前を呼んで声をかける
4. 始業時の出席確認には名前を呼び顔をみる

| 1年 | 2年 | 3年 |
|----|----|----|
| 10 | 20 | 38 |
| 45 | 54 | 32 |
| 35 | 25 | 16 |
| 3 | 0 | 10 |

3. 生徒に対しての叱り方

1. 相手の気持を考えてしかり、態度はきびしくても後味が悪くならないような叱り方をする
2. 誤解により叱ることはない
3. 一方的なきつい叱り方はしない
4. 理由のない叱り方をしない
5. 叱る前に言い分を聞く
6. 自尊心を傷つけるような叱り方はしない
7. 弱点を指摘したり皮肉をこめた叱り方はしない
8. 他の生徒と比較するような叱り方はしない
9. 叱り方がからりとしている
10. 体罰を加えた叱り方はしない
11. 悪口を伴った叱り方はしない
12. 皆の前で恥をかかせるような叱り方はせず生徒の人格を傷つけないようにし心から理解するように真心をこめて叱るようにする

| | | |
|----|----|----|
| 50 | 47 | 54 |
| 12 | 22 | 38 |
| 47 | 29 | 26 |
| 32 | 20 | 38 |
| 40 | 50 | 30 |
| 15 | 45 | 30 |
| 37 | 56 | 26 |
| 30 | 50 | 36 |
| 22 | 11 | 24 |
| 10 | 13 | 18 |
| 35 | 25 | 18 |
| 37 | 31 | 34 |

4. 生徒に対してのほめ方

1. そうそうそれはいい、などとアイデアをほめる
2. じょうずねなどと行動についてほめる
3. そう感じるのはいい、などと感じ方についてほめる
4. 生徒のよい発言や態度についてすぐほめる
5. 生徒の発言をいつもよくきいてあげる
6. 一人の生徒の発言が他の生徒にもわかるように誘導する
7. 先生の気持を生徒に伝える場合のことば使いやふんいきづくりを工夫している
8. 生徒のものの考え方については個人差が大きいので一人一人に応じた話しかけ、ほめ方を工夫している

| | | |
|----|----|----|
| 15 | 25 | 6 |
| 8 | 9 | 4 |
| 15 | 2 | 18 |
| 20 | 20 | 12 |
| 57 | 75 | 70 |
| 20 | 15 | 12 |
| 30 | 29 | 30 |
| 27 | 20 | 48 |

N = 40 N = 44 N = 50 数字%

5. 生徒に対する受容的な接し方

1. 生徒の話題に強い興味を示す
2. 生徒の立場や気持になって聞く
3. 生徒が話やすいように合づちをうつ
4. 生徒が話出そうとするきっかけを与える

| 1年 | 2年 | 3年 |
|----|----|----|
| 30 | 9 | 12 |
| 35 | 65 | 64 |
| 12 | 9 | 12 |
| 20 | 15 | 18 |

6. 授業での教師の態度

1. 先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終らせる
2. 遅刻をしてもいきなりおこらず生徒のいい分をよく聞く
3. えこひいきせずに生徒を公平に扱う
4. 指名の仕方がうまくまんべんなくあてる
5. 黒板の字がきれい
6. 教え方がわかりやすい
7. 面白い話をして授業を盛りあげる
8. 生徒のわからない所を後で教える
9. 生徒は先生に質問がしやすい
10. 先生は部活動に熱心である
11. きまりについてはいつもきちんと守らせる
12. 清掃や給食の時はいつも先生が指導している

| | | |
|----|----|----|
| 30 | 13 | 40 |
| 22 | 34 | 28 |
| 80 | 84 | 80 |
| 15 | 18 | 18 |
| 15 | 25 | 20 |
| 70 | 68 | 80 |
| 80 | 86 | 56 |
| 17 | 4 | 26 |
| 25 | 29 | 34 |
| 12 | 20 | 14 |
| 5 | 6 | 12 |
| 3 | 2 | 2 |

4. 教師の態度についての男女生徒の意識の比較

ここでは、中学1年生から3年生までの134名を男子69名、女子65名に分け、男女生徒の感覚の違いを比較してみた。

① 教師の態度

- 男生徒の望む教師の態度
「ユーモアにとむゆかいな表情」80%
- 女生徒の望む教師の態度
「親切である」53%
「上品で清潔な服装」38%
- 男女生徒がともに望む教師の態度

「ユーモアにとむゆかいな表情」 男子 80% 女子 62%

「親しみやすくきさく」 男子 73% 女子 80%

・男女生徒がともに関心のない教師の態度

「健康で休まない」 男子 13% 女子 10%

「明るい」とか「ほがらか」という感覚は男子に、「ユーモア」や「親切さ」という感覚は女子に多くみられる。教師の服装については、女子の方に関心が高く、男子の教師の服装についての関心は低いようである。

② 教師の生徒への呼びかけ方

男女の生徒は、先生に「廊下や道で会った時、生徒によく声をかけてほしい（男子46%、女子50%）」と思っているようだ。

③ 生徒に対しての叱り方

・男生徒の望む叱り方

「一方的なきつい叱り方をしない」42%

「叱る前に言い分を聞く」 50%

・女生徒の望む叱り方

「弱点の指摘や皮肉な叱り方をしない」68%

「他の生徒と比較する叱り方をしない」48%

・男女生徒が、ともに望む叱り方

「相手の気持を考えてから叱り、態度はきびしくても後味が悪くならないような叱り方をする」
男子、女子とも56%

男子生徒は、教師に、言分を聞かず一方的に叱られているようだ。女子は男子に比べ、叱られる事は少ないようだが、「弱点を指摘したり、友だちと比較するような叱り方をしてほしくない」といっている。

④ 生徒に対してのほめ方

男女ともに「生徒の発言をいつもよく聞いてほしい。（男子68%、女子83%）」といっている。女子は「生徒のものの考え方については個人差が大きいのので一人一人に応じた話しかけを工夫してほしい（43%）」と望んでいる。

⑤ 生徒に対する受容的な接し方

男女ともに「生徒の立場や気持になって聞く（男子56%、女子68%）」という教師の態度を望んでいる。

⑥ 授業での教師の態度

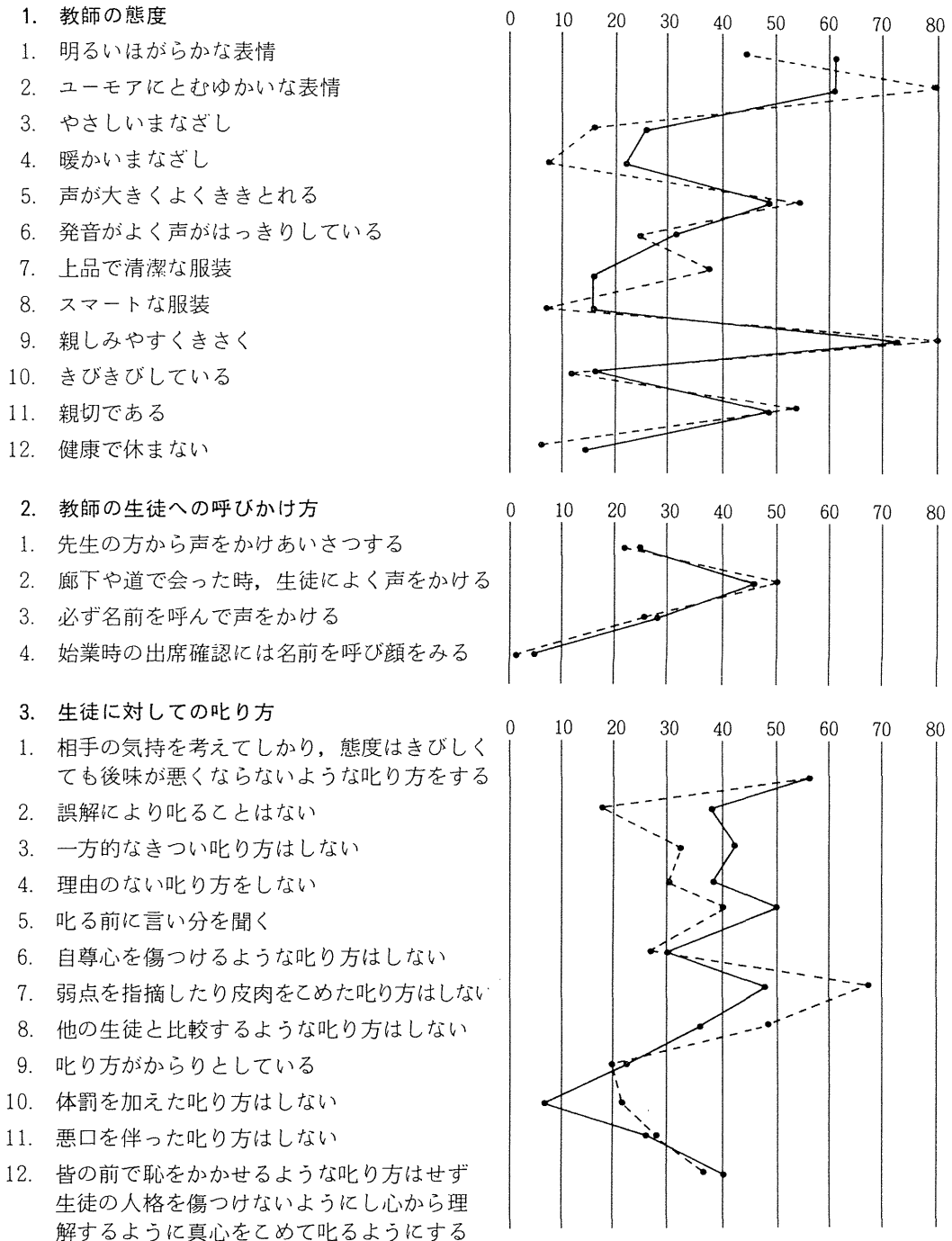
男女ともに「えこひいきせず生徒を公平に扱う（男子85%、女子95%）」、「教え方がわかりやすい（男子83%、女子80%）」、「面白い話をして授業を盛りあげる（男子78%、女子85%）」の項が高率である。

図-1 教師態度についての男女の意識の比較

中学1年生から3年生まで134名

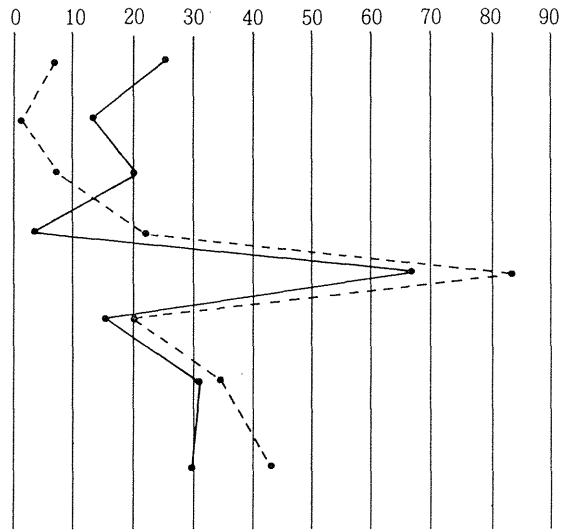
(男子69名, 女子65名)

男子—— 女子……



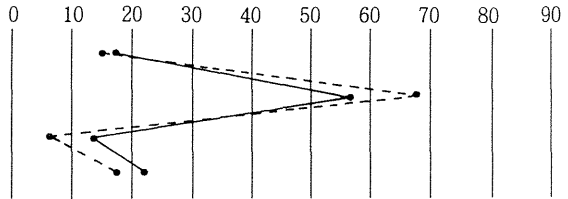
4. 生徒に対してのほめ方

1. そうそうそれはいい、などとアイデアをほめる
2. じょうずねなどと行動についてほめる
3. そう感じるのはいい、などと感じ方についてほめる
4. 生徒のよい発言や態度についてすぐほめる
5. 生徒の発言をいつもよくきいてあげる
6. 一人の生徒の発言が他の生徒にもわかるように誘導する
7. 先生の気持ちを生徒に伝える場合のことは使いやふんいきづくりを工夫している
8. 生徒のものの考え方については個人差が大きいので一人一人に応じた話しかけ、ほめ方を工夫している



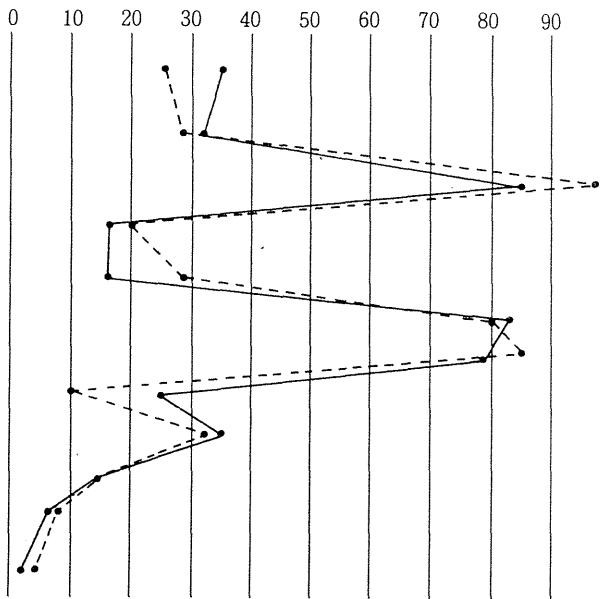
5. 生徒に対する受容的な接し方

1. 生徒の話題に強い興味を示す
2. 生徒の立場や気持ちになって聞く
3. 生徒が話やすいように合づちをうつ
4. 生徒が話出そうとするきっかけを与える



6. 授業での教師の態度

1. 先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終らせる
2. 遅刻をしてもいきなりおこらず生徒のいい分をよく聞く
3. えこひいきせずに生徒を公平に扱う
4. 指名の仕方がうまくまんべんなくあてる
5. 黒板の字がきれい
6. 教え方がわかりやすい
7. 面白い話をして授業を盛りあげる
8. 生徒のわからない所を後で教える
9. 生徒は先生に質問がしやすい
10. 先生は部活動に熱心である
11. きまりについてはいつもきちんと守らせる
12. 清掃や給食の時はいつも先生が指導している



5. 教師の自己評価

ここでは、教師自身に自分の態度について自己評価をしてもらった結果をあげる。対象は○中学校の教師45名である。なお教師のデータは、図3の教師と生徒の意識の比較にあげてあるものと同一なので、そこを参照してほしい。

① 教師の態度

| | |
|-------------------|-----|
| 「明るいほらかな表情」 | 56% |
| 「声が大きくよくききとれる」 | 57% |
| 「発音がよく声ははっきりしている」 | 51% |
| 「健康で休まない」 | 64% |

声を大きくし、発音を良くしようとする努力は、授業の効率と結びつく。しかし「上品で清潔な服装」「スマートな服装」という項目は、両方を合わせても30%ほどで、自分の服装への関心は低いようである。

② 教師の生徒への呼びかけ方

「声をかけあいさつする(71%)」「会った時、よく声をかける(68%)」の項目が高率である。「始業時の出席確認には名前を呼び顔をみる(20%)」については関心が低い。

出席の確認という教師の行動は、生徒達の所在の有無や健康観察において重要な役割を果たすのだが、あまり日常的な行動なので、関心が低いのもかもしれない。

③ 生徒に対しての叱り方

「理由のない叱り方をしない」が68%で、「悪口を伴った叱り方をしない」が60%であり、教師は、一般に生徒に対する叱り方については、慎重に配慮しているようである。

④ 生徒に対してのほめ方

叱り方の裏がほめ方であるが、叱り方と同様に、ばらつきが少ないので大部分の教師がほめ方における工夫をしているものと思われる。「じょうずねなどと行動についてほめる」が、53%と高率である。目に見える生徒のよい行動に対し、すぐにほめるというのは、生徒にとってよい励ましとなろう。

しかし、教師の気持を生徒に伝えようとする努力はあまりされていないようで「先生の気持を生徒に伝える場合のことは使いや雰囲気づくりを工夫している」という項は、33%と低い。

⑤ 生徒に対する受容的な接し方

「生徒が話やすいように合づちをうつ」の項は、68%と高い。しかし「生徒の話題に強い興味を示す」という項は、35%と関心が低い。

教師は、生徒の話を興味深く聞いてやるという心の余裕が必要であろう。

⑥ 授業での教師の態度

「遅刻をしてもいきなりおこらず生徒のいい分をよくきく」60%

「えこひいきせずに生徒を公平に扱う」 73%

「清掃や給食の時はいつも先生が指導している」 60%

以上の項目が高率なのは、教師として望ましい態度である。しかし、

「面白い話をして授業を盛りあげる」 37%

「教え方がわかりやすい」 20%

というように、わかりやすく面白い授業をすることにおいて教師が工夫していない様子が見られるのは気になる。なんとすれば、学校の中心的な役割は、授業であり、よい学級経営は、指導の効果（授業）に焦点をおかなければならないからである。

また「黒板の字がきれい」については、8%と低い率がでている。小学校低学年においては、教師はていねいに、わかりやすく板書をしているのであるが、小学校高学年や中学校となるにつけ、板書に関心がなくなる傾向にある。また個人的に字が下手だという理由から、「板書」をさけたいとするむきもあるが、板書という基本的技術は重視するべきである。

「先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終わらせる」 26%

「きまりをいつもきちんと守らせる」 40%

と関心が低い。おしゃべりで、学級の授業が成立しにくいと近頃よくいわれるが、授業成立の基礎となるルールの確立は重要であろう。

6. 教師の態度について生徒と教師の意識の比較

中学1年生から3年生の134名と同校の教師45名を対象として、生徒と教師の意識を比較した。とくに両者のずれについて着目してみた。

① 教師の態度

・生徒と教師との意識のずれの大きい項目

「ユーモアにとむゆかいな表情」 生徒71% 教師33%

「親しみやすくきさく」 生徒76% 教師51%

「親切である」 生徒52% 教師28%

「健康で休まない」 生徒12% 教師64%

教師は忙がしくて、ついユーモアを忘れがちとなったり、生徒と親しく話し合う時間がとれないのかも知れない。また教師が健康で休まないことを長所として自己評価をしても、子どもにとっては、先生が学校に来て自分たちを教えるのは、あたり前なので、先生が休むということの方が、生徒にとって意外なことなのであるらしい。

・生徒と教師のずれの小さい項目

「明るいほがらかな表情」 生徒53% 教師53%

「声が大きくよくききとれる」 生徒53% 教師57%

「上品で清潔な服装」 生徒27% 教師22%

教師も声を大きくききとりやすいように工夫し、生徒もそれを期待している。これは授業の効率との関係が深い。教師の服装については、教師・生徒両方の関心は低い。しかし教師の服装や容貌が、生徒の感情に及ぼす影響は、無視できない。教師の上品な服装は、学級の雰囲気形成には、よい要因となる。女子は、教師の服装に対して鋭敏な関心を持っている。教師は、自分が生徒を見ていると思っているが、自分も生徒に見られているということはあまり意識していないようである。教師と生徒は、いわば、見る見られるの関係にあることに気づかなくてはならない。

② 教師の生徒への呼びかけ方

・生徒と教師とのずれの大きい項目

「先生の方から声をかけあいさつする」 生徒25% 教師71%

「廊下や道で会った時、よく声をかける」 生徒48% 教師68%

教師が生徒への呼びかけ方を工夫している割には、生徒はこたえてくれない。生徒には、教師の心がとどきにくいようである。一つの原因は、生徒の数が多いため、教師との接触の濃淡ができるからかもしれない。

③ 生徒に対しての叱り方

・生徒と教師とのずれが大きい項目

「理由のない叱り方はしない」 生徒38% 教師68%

「悪口を伴った叱り方はしない」 生徒28% 教師60%

「弱点を指摘し、皮肉な叱り方をしない」 生徒58% 教師42%

生徒に比し、教師の方が、各項目に対して高い比率を示し、教師は生徒への叱り方について配慮している様子が見られる。しかし、生徒は、一般に自分の叱られ方には関心が薄いようである。

・生徒と教師とのずれの小さい項目

「相手の気持を考えてしかり、態度はきびしくても後味が悪くならないような叱り方をする」

生徒53% 教師42%

「誤解により叱ることはない」 生徒28% 教師33%

「叱る前に言い分を聞く」 生徒45% 教師51%

「他の生徒と比較する叱り方をしない」 生徒43% 教師40%

「皆の前で恥をかかせるような叱り方はせず生徒の人格を傷つけないようにし心から理解するように真心をこめて叱るようにする」 生徒40% 教師40%

生徒は、自分に非があれば、叱られてもよいと感じている。しかし一方では、叱られ方によって、自己の人権が傷つくことを恐れているようだ。とくに1項で、教師の「態度はきびしくてもよい」と生徒がいつていることに注目したい。

教師は生徒を受容する一方で、生徒の非にはきびしく対決してゆこうとする断固した態度は必要であり、生徒の方もその理由が、正しければ、叱られても、し方がないと思っているのである。

④ 生徒に対してのほめ方

教師の意識と生徒の意識のずれが非常に大きい。教師は生徒をほめるようにし、ほめ方にも配慮をしているのであるが、生徒は、あまり教師にほめられているとは感じていないようである。

「生徒の発言をいつもよく聞いてあげる」の項が生徒76%、教師48%と差が大きいのは気になる。教師は心をこめて、生徒の言うことを傾聴すべきであろう。

⑤ 生徒に対する受容的な接し方

「生徒の立場や気持ちになって聞く」の項が、生徒63%、教師40%と差が大きいのが目立つ。教師は、生徒を導びく立場として、自分を高見に置きがちであるが、人格対人格ということで生徒と対等の土俵に降りて向いあう姿勢が大切であろう。合づちのような技巧的な接し方は生徒側として、関心が低いようである。

⑥ 授業での教師の態度

「教え方がわかりやすい」 生徒82% 教師20%

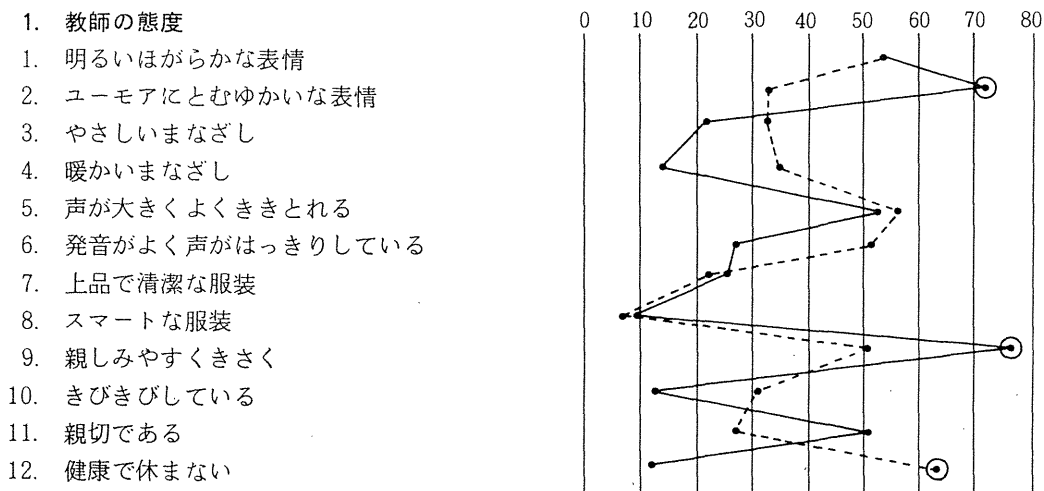
「面白い話をして授業を盛りあげる」 生徒82% 教師30%

教師は、わかりやすい面白い授業を一層工夫すべきであり、生徒もそれを望んでいる。

「えこひいきせず生徒を公平に扱う」 生徒92% 教師73%

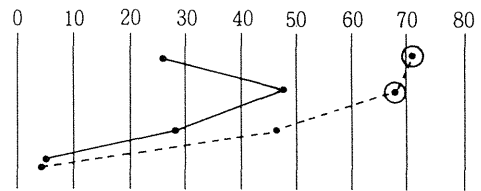
生徒は教師に対し、とくに公平に扱うことを要望している。また教師は、板書の工夫や始業のベルと共に教室に行くことなど、日常的な指導に、もっと意を用いる必要がある。

実線 — 中学1年生から3年生 134名
 点線 …… 中学教師45名
 ○印はズレの大きい項目



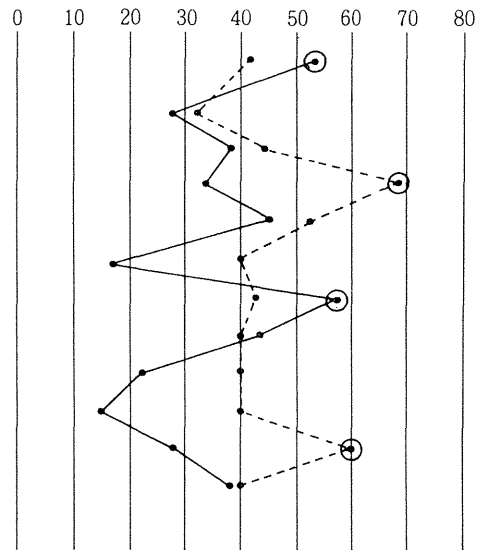
2. 教師の生徒への呼びかけ方

1. 先生の方から声をかけあいさつする
2. 廊下や道で会った時、生徒によく声をかける
3. 必ず名前を呼んで声をかける
4. 始業時の出席確認には名前を呼び顔をみる



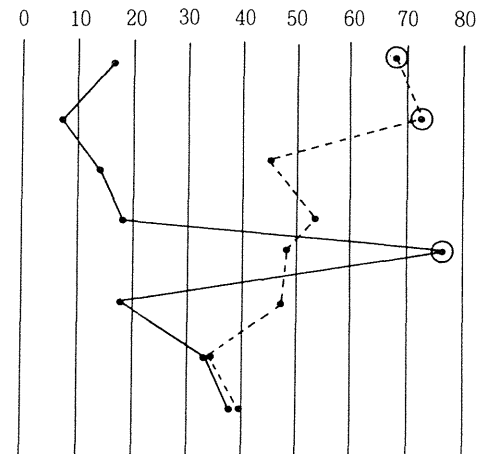
3. 生徒に対しての叱り方

1. 相手の気持を考えてしかり、態度はきびしくても後味が悪くならないような叱り方をする
2. 誤解により叱ることはない
3. 一方的なきつい叱り方はしない
4. 理由のない叱り方をしない
5. 叱る前に言い分を聞く
6. 自尊心を傷つけるような叱り方はしない
7. 弱点を指摘したり皮肉をこめた叱り方はしない
8. 他の生徒と比較するような叱り方はしない
9. 叱り方がからりとしている
10. 体罰を加えた叱り方はしない
11. 悪口を伴った叱り方はしない
12. 皆の前で恥をかかせるような叱り方はせず生徒の人格を傷つけないようにし心から理解するように真心をこめて叱るようにする



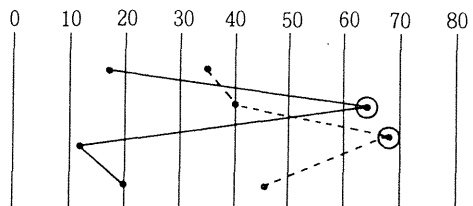
4. 生徒に対してのほめ方

1. そうそうそれはいい、などとアイデアをほめる
2. じょうずねなどと行動についてほめる
3. そう感じるのはいい、などと感じ方についてほめる
4. 生徒のよい発言や態度についてすぐほめる
5. 生徒の発言をいつもよくきいてあげる
6. 一人の生徒の発言が他の生徒にもわかるように誘導する
7. 先生の気持を生徒に伝える場合のことは使いやふんいきづくりを工夫している
8. 生徒のものの考え方については個人差が大きいので一人一人に応じた話しかけ、ほめ方を工夫している



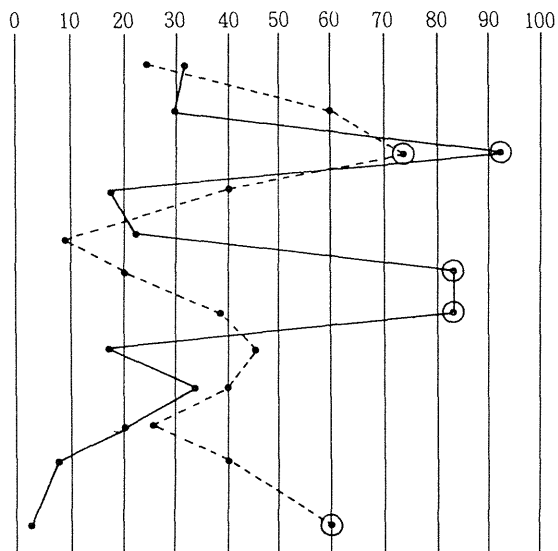
5. 生徒に対する受容的な接し方

1. 生徒の話題に強い興味を示す
2. 生徒の立場や気持になって聞く
3. 生徒が話やすいように合づちをうつ
4. 生徒が話出そうとするきっかけを与える



6. 授業での教師の態度

1. 先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終らせる
2. 遅刻をしてもいきなりおこらず生徒のいい分をよく聞く
3. えこひいきせずに生徒を公平に扱う
4. 指名の仕方がうまくまんべんなくあてる
5. 黒板の字がきれい
6. 教え方がわかりやすい
7. 面白い話をして授業を盛りあげる
8. 生徒のわからない所を後で教える
9. 生徒は先生に質問がしやすい
10. 先生は部活動に熱心である
11. きまりについてはいつもきちんとして守らせる
12. 清掃や給食の時はいつも先生が指導している



7. 考 察

教師の態度についての行動目録で、評価の観点としているのは次のことである。

① 教師と生徒間の非言語的相互作用

教師の態度が生徒に与える心理的影響が評価できる。

② 教師と生徒間の一般的な相互作用

教師の子どもに接する場合の望ましいあり方について評価できる。

③ 教師と生徒間の相互作用の違い、男女生徒の意識の差が評価できる。

とくに教師と生徒の意識のずれに着目して教師が自己評価をすることにより、生徒理解や生徒指導の手掛りを得ることができる。

以上の三点を尺度として結果を考察し、わかったことを次に述べる。

(1) 学年の発達段階による生徒と教師の相互作用においては、それほど差は見られない。

傾向として、低学年ほど教師に依存し、教師の態度に関心が高いことがわかった。

(2) 教師の態度について男女生徒の相互作用の違いを見ることにより、男女の特性がわかる。

例えば、「上品で清潔な服装」は38%と女子の方が関心が高く、男子は15%と低い。当然なことであるが、教師の服装については、女子の方が関心が高い。また、「ユーモアにとむゆかいな表情」は、80%と男子が高率で「親しみやすくきさく」は、女子が80%と高率である。どうやら「ユーモア」は男子の感覚で、女子は「親しみやすい」という教師態度を望んでいるように思われる。

(3) 教師と生徒の相互作用のずれを見ることにより、教師は自分の態度について自己評価ができる。

例えば、子どもたちは「教え方がわかりやすい」を82%の高率で望んでいる。それに対して、教師は30%であり、差が大きい。学校の中心的な役割は、授業であり、よい学級経営は、わかりやすい授業から始まるのであるから、この差は気になるところである。

また、「えこひいきをせず生徒を公平に扱う」には、生徒92%、教師35%と差が大きい。「皆の前で恥をかかせるような叱り方をしない」についても、生徒60%、教師28%と差が大きい。生徒の持つ人権感覚が教師の態度に敏感に反応しているといえ、教師は生徒の人権を尊重するような接し方をする必要がある。「相手の気持を考えてしかり、態度はきびしくても後味が悪くならないような叱り方をする」は、生徒52%、教師42%と接近している。

教師は、子どもを受容しなければならないが、教師と子どもの関係には、きびしい対決と統合という相互関係が一方にはある。子どもたちは、理由があれば、叱られてもよいと思っている。教師も時としては、断固とした態度を示すことが必要だと感じている。子どもも、また教師のきびしさを望んでいるといえる。

(4) 教師の授業態度のあり方の評価ができる。

例えば、「先生はベルと共に教室に行きベルと共に授業を終らせる」「黒板の字がきれい」「きまりについては、いつもきちんと守らせる」という項目についての教師の関心は、26%、8%、26%とそれぞれ低い。学校生活の基本的ルールの再点検、基礎的教授技術の徹底については、さらに配慮する必要があるだろう。

目録活用の際の今後の課題は、次のようである。

① 同じような意味の項目が散在するので、それらの項目を整理し、より評価が確実になるように工夫する。

② 学習指導に役立つ目録を作成する。

学級には、学業に遅れがあるもの、学習態度が悪くて学習の能率が、あがらないものなどがいて、教師は日常的に、それらの指導に苦慮しているのが実状である。今後は、学級の適応に問題のある子どもの指導に役立つ教師の行動目録を作成しようと計画している。